

論文内容要旨

論文題名

Relationship between Skeletal Muscle Mass and Swallowing Function in Patients with Alzheimer' s Disease.

(アルツハイマー型認知症高齢者における骨格筋量と嚥下機能の関連)

掲載雑誌名

Geriatrics & Gerontology International (掲載予定)

スペシャルニーズ口腔医学系 口腔衛生学 高城大輔

内容要旨

緒言

近年、認知症は世界的に増加傾向を示しており、そのなかでもアルツハイマー型認知症 (AD) は今後も増加することが予想され、対策が必要である。

一方で、加齢に伴う骨格筋量の低下であるサルコペニアは高齢者の健康障害に繋がるとして注目されている。また、AD の進行と除脂肪重量低下が先行研究において報告されており、骨格筋量低下と AD の進行が関連することが推測される。

さらに、サルコペニアは口腔機能および嚥下機能との関連が示唆されており、これらの要因が骨格筋量低下に関連していることが考えられる。また、AD 重症度と口腔機能、嚥下機能との関連についても報告されており、重度 AD 高齢者では口腔機能、嚥下機能の低下が示唆されている。

以上をふまえると、重度 AD 高齢者の骨格筋量低下は AD の進行だけでなく、口腔機能低下もしくは嚥下機能低下にも関連すると推測されるが、AD 高齢者を対象に口腔機能、嚥下機能と骨格筋量の関連を検討した報告は認められない。

したがって、本研究は、AD 高齢者は AD の進行だけでなく、口腔機能あるいは嚥下機能の低下も関連して、骨格筋量が低下するとの仮説を検証する目的で軽度から重度 AD 高齢者を対象に横断調査を行った。

方法

日本の 2 地域の AD 高齢者 232 名 (平均年齢 85.4 ± 5.9 歳) を分析対象とした。調査項目は基礎情報 (性別, 年齢), 骨格筋量指標 (Skeletal Muscle Index: SMI) と認知症重症度 (Clinical Dementia Rating: CDR), 身体機能評価 (Barthel Index: BI), 栄養状態評価 (BMI, Calf Circumference: CC, Mini-Nutrition Assessment short form: MNA-SF), 口腔所見と口腔機能 (Occlusal Contacts,

Tongue Function), 嚥下機能 (Modified Water Swallowing Test : MWST) とした.

結果

CDR分布はCDR0.5 (very mild) が 21 名(9.0%), CDR1 (mild) が 85 名(36.6%), CDR2 (moderate) が 88 名(37.9%), CDR3 (severe) が 38 名(16.3%)であった. SMI は severe と他 3 群との間に有意差を認めた. SMI 低下を目的変数としたステップワイズ法による多重ロジスティック解析の結果, CDR severe (Odds Ratio [OR]:11.68 95% Confidence Interval [CI]:4.52-30.20), BMI 18.5kg/m² 未満 (OR:3.18 95%CI:1.27-8.00), CC 30.5cm 未満 (OR:9.33 95%CI:2.01-43.27) と嚥下機能低下 (OR:4.93 95%CI:1.10-22.04) が有意な関連因子として挙げられた.

考察

AD 高齢者の骨格筋量低下には AD の重度化のほか, 嚥下機能低下も関連することが示唆され, AD の重症度だけでなく嚥下機能低下にも注目する必要があると考えられた.